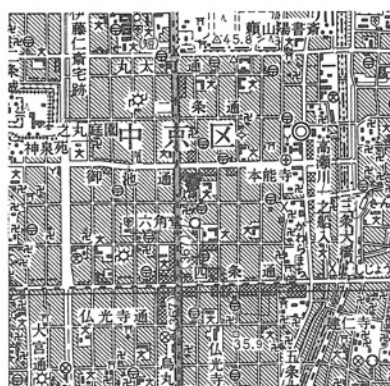


京都・平安京跡左京三条三坊十三町

(後藤庄三郎家屋敷跡)

- 1 所在地 京都市中京区烏丸三条上ル場之町
- 2 調査期間 一九九一年(平3)九月～一九九二年六月
- 3 発掘機関 勅京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 辻 裕司・鈴木廣司
- 5 遺跡の種類 都城跡、近世都市
- 6 遺跡の年代 九世紀～一七世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東北部)

調査地点は平安京左京三条三坊十三町に該当する。平安時代後期、ここには御所として三条東殿が営まれたが、平治元年(一一五九)の平治の乱が勃発した折に焼亡している。一方、江戸時代初期には金座を主宰した後藤庄三郎が姉小路に面して居を構えたことが知られている。今回報告する木簡はこの後藤家敷地内で検出した遺構から出土したものである。

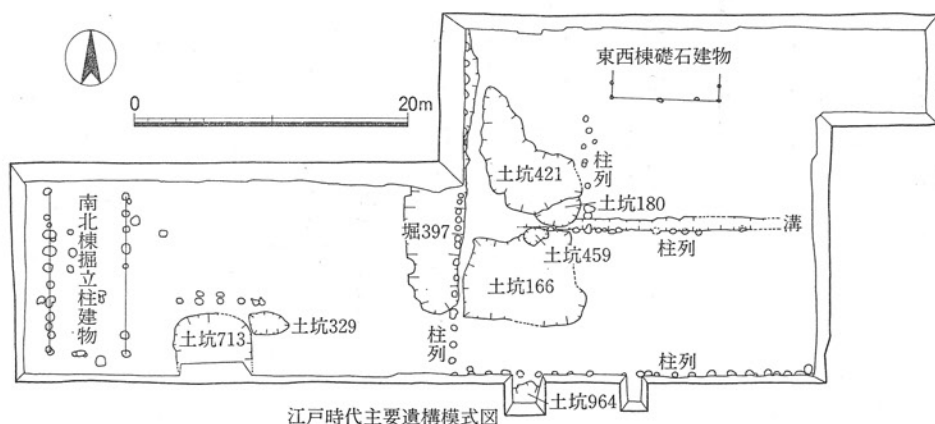
調査区は十三町のほぼ中央から東洞院大路の西半にかけての地区に東西約六五m、南北約二五mの範囲で鉤形に設定した。基本的な層序は現地表下に積土層と江戸時代中期以降の整地土層が厚さ約二・五mあり、整地土層下には洪水による堆積層と考えられる厚さ〇・一～〇・四mの黄灰色砂礫層が堆積する。砂礫層下には江戸時代前期の整地層や室町時代の整地層があり、室町時代の整地層を除去するとほぼ無遺物層(調査区西半では黄褐色粘土、東半部では砂礫層)となる。各土層の上面で平安時代から江戸時代の遺構を検出した。

平安時代に属する遺構には上半方形・下半円形縦板組の井戸側を有する井戸がある。また同井戸掘形から井籠組井戸部材も出土した。室町時代に属する遺構には東は東洞院通、西・南はそれぞれ一町の中心を限る堀で画された方四分の一町(約六〇m四方)に復原できる邸宅跡がある。西限の堀の検出幅は六mを越える。敷地東南部には約一一m四方の池がある。拳大の礫を敷いて景石を配し、滝口を構築する。竜泉窯青磁牡丹文鉢・磁洲窯白磁山水図枕などが出土した。

江戸時代前期に属する遺構には、東洞院通に面する宅地に伴う東西棟礎石建物・井戸・土坑などと、その西の後藤家に伴う柱列・南北棟掘立柱建物・池・堀・土坑及び小径などがある。後藤家敷地は京都大学附属図書館蔵『洛中絵図』から概略復原でき、検出した遺構と絵図を重ねれば調査区の西五分の三が後藤家敷地南部に該当す

ることが判明する。後藤家敷地に伴う遺構について概要を示すと、小径は調査区南端で検出した東西方向のもので東洞院通から後藤家敷地内にまで及ぶ。土坑(池)四二一・堀三九七は調査区中央にあり南北方向に長い平面形を呈する。土坑東側に後藤家の東の境界を示す南北方向の塀と考えられる柱列があり、土坑四二一埋没後には西肩口に沿って塀が設けられた。調査区西端に掘立柱建物がある。土坑四二一南部には土坑一八〇、土坑一六六、土坑四五九、土坑九六四がある。土坑内の埋土は灰・炭が主体であり木製品などが投棄されていた。調査区南端の空閑地には多数の土坑があるが、土坑四二一や土坑七一三には泥土層が堆積し木製品や土器などが大量に投棄されていた。これらの土坑周辺の無遺物層は粘土層であり、木質遺物が良好な状態で遺存する条件となったようだ。

遺物は整理用コンテナで六九〇箱分出土しており、土器・瓦類が五〇三箱、木質遺物は二七箱、その他一〇箱ある。内訳は土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、獣骨、種子、木製品などがある。土器・瓦類の半数以上および木質遺物は江戸時代前期に属する遺物である。主要な木製品を挙げると、工具では漆塗篋・刷毛・工具柄・漆布、服飾具では扇子・下駄、容器では漆器碗・漆器皿・漆塗折敷・折敷・漆塗曲物・曲物・桶・釣瓶・柄杓・籠編物・把手、食事・調理具では箸・切匙・杓子、調度具では燈架・漆塗部材、遊戯具では木球・羽子板・舟・人形、計量具では物指、祭祀具では



江戸時代主要遺構模式図

土坑七一三

「カ」

52×30×4 021

十一月十四日

・「マ」五太力苅 $\square\square\square\square\square\square$
 $\square$ 之 $\square\square\square\square\square$ 」
 99×19×2 032

・一〇十二月十三日

[illegible]

☐	☐	五郎	☐	☐
☐	☐	九郎	☐	☐

$$(60) \times 283 \times 5 \quad 065$$

求

〔福力〕
□帳

(2)

□

• [] (142) × 29 × 3 019

(23)

土坑四五九

(16) 「○(目印) □仁五ツ之内」

・「^{土カ}嶋弥五郎」 137×33×7 011

(17) 𠂇(目印) 五大力苐

$\cdot \angle \oplus$	符中	$\square$	(122) × (18) × 4	039
-----------------------	----	-----------	------------------	-----

(18) 

二十一日
(78)×(8)×1 013

(19) 「○かん七ツ之内
こひ□□
うへ—

「○十二月十三日
100×15×2 011」

(20) 「廿八石之内 てん たう」

141×28×2 051

(21)  (105) × 29 × 3 051

275×23×5 061

☐ の日 ☐ のうち ☐ の六
 藤の御客入
 藤の殿出 ☐
 使御馬ノ衆へ ☐
 藤介様へ ☐
 越御中 ☐
 の用 ☐

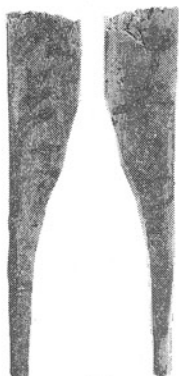
遣
内日□
左近〔殿カ〕
御出□
藤介様
飛〔前カ〕
□様□
三□御用
□の日記

(54) $\times 305 \times 4$ 065

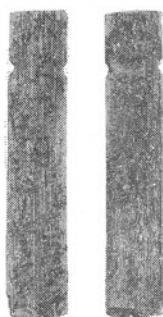
土坑(池)四二一出土木簡



(11)

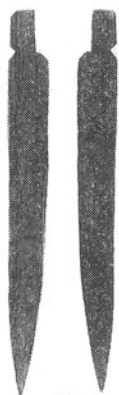


(9)

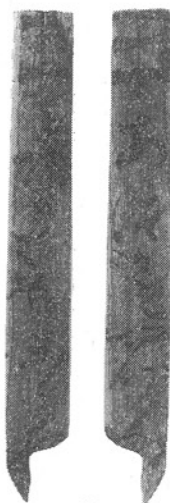


(12)

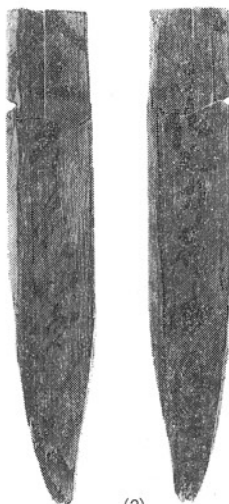
土坑一六六出土木簡



(5)



(1)



(2)

土坑七二三出土木簡



(8)

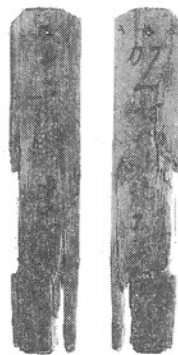
土坑一八〇出土木簡



(21)



(20)



(19)

(24) ・「せつ□□○」

・「御台所 ○」

258×30×4 061

(25) ・「□□□□ 六ッ□□□□」

・「□□□□」

235×25×4 051

(26) ・「□□□□□六□□」

・「『卅』」

(169)×(41)×4 081

土坑九六四

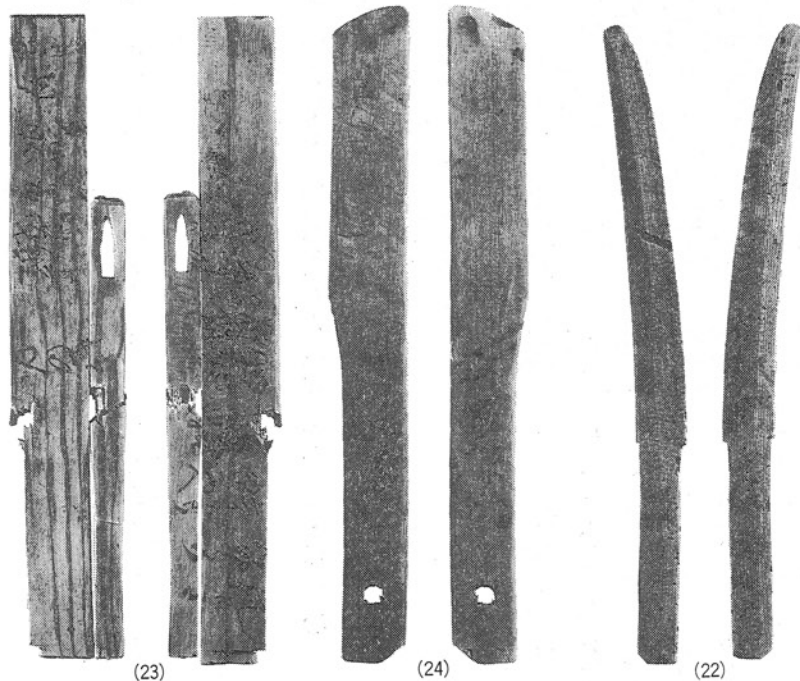
(27) ・「くく 伊勢大神宮」

・「くく 伍大力菩薩」

199×48×8 032

木簡は八六点出土しており遺構ごとの出土数は土坑一六六は一九点、土坑四二一は三七点、土坑七一三は一九点であり、これ以外では土坑一八〇・三二九・四五九・九六四で一〜三点、堀三九七で一点である。このうち文字が不鮮明で判読し難いものは示していない。

土坑一六六・四五九の出土木簡は頭部に「目印」(商標)を書いた付札が大半を占める。土坑四二一出土木簡のうち一八点が柿状の薄板一枚ごとに「南無阿弥陀仏」を墨書したものである。(9)は下半の側面を削り、ヘラ状木製品に転用する。(11)は片面中央に墨で印を押す。付札は五点あるが一点を除き墨痕はない。土坑七一三出土



木簡では木製品の刀形²⁴に刃文を描き茎に銘の体裁の墨書のあるものや切匙²⁴に墨書したもの、木簡を半截し組み合わせ部材に転用した横材の木簡²³がある。部材は側縁を削っており上半とは直接接続はしない。この横材の木簡は表裏に来訪者を記録した「日記」で、内容、使用法ともに興味深いものである。

なお、木簡の釈読については京都文化博物館の藤本孝一氏のご指導を受けた。

(辻 裕司)

大阪・大坂城跡 (1)

- 1 所在地 大阪市中央区大手前三丁目
- 2 調査期間 一 一九九〇年(平) 四月～一九九一年三月
二 一九九一年四月～一九九二年三月
三 一九九二年四月～一九九三年六月
- 3 発掘機関 勸大阪文化財センター
- 4 調査担当者 鋤柄俊夫・中村淳磯・新海正博・亀井 聡
- 5 遺跡の種類 中・近世都市
- 6 遺跡の年代 弥生時代～近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪東北部二万五千分の一)

大坂城跡は、石山本願寺、豊臣期大坂城、江戸期大坂城と、度重なる造成を経て形成された遺跡である。特に夏の陣後に盛られた江戸時代前期の盛土は、厚さ4m以上に及ぶ膨大なものである。

今回報告する大坂城三の